KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

『胡蘭河伝』論

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 蕭紅, 『胡蘭河伝』, 不条理, 「無責任で無自覚な殺人集団」 キーワード (En): 作成者: 山本, 和子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006210

関西外国語大学 研究論集 第87号（2008年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.87 (March 2008)

『胡蘭河伝』論

山　本　和　子

要　旨

蕭紅の後期の代表作とされる『胡蘭河伝』は1940年、香港で完成された。当時は日中戦争のさなかで、蕭紅の故郷東北は日本の占領下にあった。帰りたくとも帰れない状況のなか、蕭紅は遠く離れた故郷胡蘭での幼少期を振り返って、その「忘れがたい」光景を書き綴った。それが『胡蘭河伝』である。伝は物語の意。作品は全七章とエピローグから成り、各章はそれぞれ異なる物語で、短編としても十分に読み応えのあるものである。物語では、祖父と過ごした屈託ない日々のほのぼのとした情景が描かれる一方、因習や迷信に縛られた人々が元気な少女を死に追いやる残酷で哀しい情景も描かれている。作者は物語のなかで、愚昧な民衆が「無責任で無自覚な殺人集団」と化す深刻な問題を提起し、人間存在の不条理性を鮮明に描き出した。本稿では、『呼蘭河伝』の背景を探りながら、作者が意図したところ及び作品の魅力の所在に迫った。

キーワード：蕭紅、『胡蘭河伝』、不条理、「無責任で無自覚な殺人集団」

はじめに

胡蘭河は中国の東北、ハルピンの北にある胡蘭県を流れ、松花江に注ぐ。この河の下流域に胡蘭県の県城胡蘭がある。県城胡蘭は河の北に位置し、河の南は二十世紀初頭「見渡す限り柳が群生していた」[1]という。1911年、『胡蘭河伝』[2]の作者蕭紅[3]は、この町で生まれた。

蕭紅の後期の代表作とされる『胡蘭河伝』は、彼女の「生涯にわたる経験と思想が凝集したもの」[4]であり、畢生の大作である。この作品は日中戦争のさなか、1937年12月ごろから断続的に書き進められ、1940年12月20日に完成する。[5]

そのエピローグで、蕭紅はこう語る。

> 胡蘭河という小さな町に、以前、わたしの祖父が住んでいた。今、わたしの祖父が眠っている。
>
> わたしが生まれたとき、祖父はすでに六十を過ぎていた。わたしが四、五歳になると、祖父は七十に近かった。わたしがまだ二十歳にならないうちに、祖父は八十歳になった。

祖父は八十を越えるとすぐ死んだ。

かつてのあの裏庭の主人は、今はもういない。老主人は死んだ。幼い主人は逃げていった。

あの庭の蝶やバッタやトンボは、今でも年々変わらないかもしれない。ひょっとしたら今ではすっかり荒れ果ててしまったかもしれない。(中略)

以上、わたしが書いたのはこれといって美しい物語ではないけれど、彼らがわたしの幼年時代の記憶を満たし、忘れられず、忘れがたい。ただそれだけのことでここに書き留めたのである。[6]

『胡蘭河伝』を執筆するまでに、蕭紅は人間社会のありとあらゆる不条理を経験していた。社会の至るところに存在する封建的抑圧、日本の帝国主義的侵略、貧困、そして女であること、これらの不条理が彼女を重苦しく締め付けていたのである。とりわけ女であることは、彼女にとって生涯逃れられない深刻な不条理であった。

蕭紅は、男性ジャーナリストで評論家でもある聶紺弩に、次のように言う。

「あなたにわかる？　わたしは女よ。女の空は低く、翼は薄いの。身の回りには厄介な物が重くのしかかっていて、本当にわずらわしい。女には自己犠牲の精神が有りすぎる。それは勇敢だからではなく、臆病だからなの。長期にわたる救いのない犠牲状態の中で、犠牲に甘んじる惰性が身に付いたのよ。わたしにはわかっている。だけど、考えてしまう。わたしは何者？　屈辱が何だっていうの？　災難が何だっていうの？　死さえも何だっていうの？　わたしにはわからない。わたしは一人？　それとも二人？　このように考えるのがわたしなの？　あのように考えるのがわたしなの？　よし、わたしは飛ぼう。だが、同時に……わたしは落ちるだろう、と予感する。」[7]

人間を愛し、人間の「温かさ」と「愛」を求め続けた蕭紅であるが、報われることはほとんどなかった。彼女の生きた道を辿ってみると、わざわざ茨の道を選んで生きたのではないか、とすら感じさせられるのであるが、それは、彼女があくまで真摯に生きた証ではなかろうか。

1930年代という激動の時代を生きて、人間存在の不条理を知り尽くした蕭紅が、その鋭い感性のフィルターを通して、「忘れがたい」記憶のなかの胡蘭の町と人々を映し出した。それが『胡蘭河伝』である。

一

1936年12月に出版された『生死の場』[8]が大きな反響を呼び、蕭紅は「抗日作家」として上海文壇にその地位を確立した。そして、いよいよ創作活動旺盛な時期を迎える。しかし、自ら「多病」というように、不眠、発熱、頭痛、腹痛、貧血、と身体の不調に悩まされる。[9]そのうえ、日本による軍事侵略、夫である蕭軍との葛藤等、不安と苦痛が彼女に付きまとう。

とりわけ彼女を苦しめたのは蕭軍の恋愛問題であった。蕭軍は最愛の夫であり、同志である。にもかかわらず、平気で彼女の心を踏みにじるのだ。感受性豊かで繊細な蕭紅は傷つき悩み、孤独感を深めていく。その彼女の精神的拠り所となったのが、父とも師とも仰ぐ魯迅であった。彼女は魯迅の家を頻繁に訪れるようになる。魯迅の妻許広平は、当時の蕭紅を次のように回想している。

> 毎日一度ならずやって来たのは彼〔蕭軍〕ではなく蕭紅女士であった。それで、わたしはできるだけ時間を割いて、階下の客間で蕭紅女士に付き合わざるを得なかった。彼女は時にとても楽しそうに談笑もしたが、無理に繕って話をし、強烈な哀愁に襲われることがしばしばあった。それは紙で水を包むように、染み出さないわけにはいかなかった。もちろん、蕭紅女士は懸命にこらえているのだが、ヤカンを火に掛けているのにヤカンの外側が水滴だらけになるように、全く覆い隠せなかった。[10]

のちに蕭軍と別れることを決意したとき、蕭紅は「愛しているのに、妻であることがつらい」ともらす。

> 「わたしは蕭軍を愛し、今なお愛している。彼は優秀な小説家で、思想の上では同志だし、苦難を共にしてきた。しかし、彼の妻であることはつらくてたまらない。あなたたち男はどうしてこんなに怒りっぽいのかしら？　どうして妻に当たり散らすのかしら？　どうして妻に対して忠実でないのかしら？　ずいぶん長い間屈辱に耐えてきたわ……」[11]

女であるがゆえに、男の理不尽な仕打ちに耐えなければならない。これは蕭紅にとって、重大な不条理であった。この不条理はどこから来るのか？　彼女はその答えを求めて、男が女を抑圧する仕組みをつぶさに観察した。そして、そこにはゆるぎない歴史的文化的背景があり、その社会を作り出すのに、被抑圧者である女がむしろ積極的に加担していることに気付くのである。同時に、「敏感で誇り高い内心では、女性は独立した存在であり、彼女は彼女のものであって、たとえどんなにその男を愛していても、その男の従属物ではない、と強く確信してい

た。」[12]これほど覚醒した意識を持ちながら、現実の愛情関係においては弱者であり、「愛」ゆえに男の理不尽な仕打ちに耐えている。その心の葛藤は、やがて彼女に離婚を決意させることになる。

1938年春、西安で、蕭紅は蕭軍に「三郎〔蕭軍〕——私たち、永遠に別れましょう」[13]と切り出す。『胡蘭河伝』に着手したころ、蕭紅はまさに苦悩のまっただ中にいたのである。

一方、1937年７月７日に勃発した日中戦争は激化の一途を辿り、８月23日には上海が日本軍に占領される。９月、蕭紅は蕭軍とともに上海を離れる。西安で蕭軍と訣別したのち、端木蕻良とともに武漢に向かう。1940年１月、香港へ。12月20日『胡蘭河伝』完成。

蕭紅は、ほぼ三年の歳月をかけて『胡蘭河伝』を完成したのだが、その間、武漢、臨汾、西安、武漢、重慶、香港、と目まぐるしく移動を重ねている。常に日本軍の空爆の脅威にさらされていて、心休まることがなかった。

1941年12月８日、太平洋戦争勃発。ほどなく、安全と思って逃れてきた香港にも日本軍が侵攻して来る。戦乱状態に陥り医療機関も混乱するなか、1942年１月22日、蕭紅は故郷胡蘭の町から遠く離れた香港で病死する。享年三十二歳。

二

『胡蘭河伝』は全七章とエピローグから成る。物語の時代は二十世紀初頭、舞台は中国東北の田舎町胡蘭である。第一章では胡蘭の町の概貌が、第二章では胡蘭の祭事や風習が紹介される。第一章、第二章が物語の序曲となって、第三章以下、「わたし」の目を通して物語が展開する。第三章では幼い「わたし」と祖父の日常の断片が語られ、第四章では「わたし」の家と借家人たちが紹介される。そして、第五章はこの作品のクライマックスとも言うべき「童養媳」〔将来息子の嫁にするために子供の時から引き取られた娘〕の物語、第六章は遠い親戚にあたる「有二伯」の物語、第七章は借家人の貧しい粉挽き「馮歪嘴子」〔口まがりの馮〕の物語と続く。

物語の舞台である胡蘭の町は、広々とした肥沃な胡蘭平原の真ん中にある。1938年１月、武漢から臨汾に向かっていた蕭紅は、車窓に広がる黄土高原を眺めながら、故郷胡蘭に思いを馳せる。「私たちの故郷は見渡す限りの平原で、夏は緑、冬は白、春になると大地は太陽に蒸されて、冬から生き返るかのように蒸気が上がるのよ。秋には刈り入れをするの」[14]

第一章は、その平原の冬から始まる。大地は凍って縦横に裂け、空はどんよりと灰色で、一日中粉雪が舞う。馬車を引く馬は白い息を吐きながら、見渡す限りの雪原をひた走る。蕭紅の描写を読むと、まるで映画のスクリーンを見ているようだ。真っ白な雪に覆われた荒涼とした平原を写していたカメラが、その中にぽっかり現れる田舎町胡蘭を捉える。それから、「顕微鏡の下に置いてつぶさに見る」[15]ように、町の一角を大写しにする。

この町の東二道街には大きな泥の窪みがある。この泥の窪みは道いっぱいに広がっていてとても深い。雨が降ると、馬車はもちろん、歩いて通るにも道沿いの人家の塀にへばり付くようにして通らなければ泥沼に落ちてしまう。豚や馬や人までもが落ちて生命を落とすことさえあるのだ。人々は、泥の窪みに落ちたものを救い出すのに大騒ぎするが、一方では、落ちたものの不幸を、見世物でも見るように楽しんでいる感すらある。この危険をどう回避するか、議論紛々だ。しかし、泥の窪みを埋めて平らにしようという根本的解決策を考える人間はいない。

この泥の窪みにまつわる挿話の一つ一つから、「他人の不幸を喜んだり、その場しのぎでお茶を濁したり、消極的でいい加減な生き方をする」[16]人間像が鮮明に浮かび上がってくる。

町のなかでひときわ精彩を放っているのは、死者を弔うための品々を商う店である。その店先に並んでいるのは精巧な紙細工で、家から家具調度品に至るまでこの世のものそっくりに作られている。それを死者のために燃やしてやると、死者はそれをあの世に持って行けるという。だが、この仕事を生業としている人間が、実はあの世を信じていない。

> もし、誰かが彼らに、「人は何のために生きるの？」と尋ねたら、彼らはすぐさま「食べて着るためだよ」ときっぱり答えるだろう。
>
> 「死んだら？」と尋ねたら、「死んだらおしまいさ」と答えるだろう。[17]

そして、ひっそりと静寂に包まれた胡同。ときおりやってくる麻花売りや涼粉売り、豆腐売りの売り声がその静寂を破る。すると、住人たちが出てきて、しばし賑やかな駆け引きが繰り広げられる。やがて、日が暮れ、夕焼け空から星空へ。一日一日と何事もなかったように過ぎ、春夏秋冬が巡るが、そこに暮らす人々の生活も思考も百年一日の如く、変わることはない。

三

第二章では、胡蘭の人々の暮らしのなかに生き続ける土俗的信仰や風習が語られる。

例えば、跳大神。跳大神は神降ろしの祈祷である。病人が出ると、人々は物の怪が憑いたと信じ、その物の怪を追い出すのに「大神」と呼ばれる祈祷師を招く。招かれた祈祷師は赤いスカートを身に着け、おどろおどろしく身体を震わせながら祈祷を唱える。時に激しく時に哀調を帯びたその声は、ドンドンドンドンと打ち鳴らされる太鼓の音と相まって、人々をなんとも切なくやるせない思いに誘うのである。この寂れた田舎町では、それは格好の見世物であり、ドンドンと太鼓の音が聞こえてくると、畏れと期待で人々は駆け付けずにはいられない。見物人にとっては、病気がなおったかどうかは二の次で、大神の衣裳や「演技」の上手下手が最大の関心事である。一方、厳かに神降ろしをする大神のほうは、供え物の鶏を持ち帰って食べ、

供え物の布地で服を作り、また、供え物が少ないと見てとると、脅迫まがいの祈祷文を唱えて追加を催促する。如何にも人間くさく、商売っ気たっぷりなのである。

それから、娘娘廟。胡蘭には女の神を祭る娘娘廟と男の神を祭る老爺廟がある。四月十八日は娘娘廟の縁日であるにもかかわらず、人々はまず老爺廟に参ってから娘娘廟に参る。なぜなら、人々はあの世でも男尊女卑だと思っているから、先に老爺廟に参るのだ。

人はなぜ男の神を畏れ、女の神を敬わないのか？　作者の解釈はこうである。それらの像を造ったのは男だ。だから、男の像を大きく猛々しく造り、女の像は柔和に造ったのだ。人々は恐ろしいものには畏敬の念を抱いて自ずと跪くが、やさしいものには尊敬の気持ちなどかけらも起こさない。

> 女の像を、何故あのように温順に作るのか？　それは温順であるのは逆らわない、逆らわないのは侮りやすい、さあ、みんな、彼女を侮りにおいで、と言っているのだ。
> 人はおとなしければ、異類が侮るばかりでなく、同類でさえも同情しない。[18]

如何にも女の自立を求めた蕭紅らしい捉え方である。彼女は自分自身をも含めて女が温順であるから男に侮られるのだ、と唇を噛んだにちがいない。

その他、夏の盂蘭盆会の灯籠流しや秋の収穫に感謝する河原芝居など、胡蘭の祭事が綴られる。そこには、人生ってなんと悲しく哀れなんだろう、と溜息にも近い寥々とした感慨が満ちている。そして、作者はそれらが神とか霊の形を借りて、人々の思考や行動を縛っていることを明らかにしていく。それらが如何に欺瞞に満ちたものであるか、また、盲目的にそれを受け入れる人々が如何に愚昧であるか、描写の背後から浮かび上がってくるのである。

四

この『胡蘭河伝』が書かれたのは、先に述べたように、日中戦争のさなかである。故郷東北には、帰りたくとも現状では帰れない。帰れないとなると、望郷の思いはますます募る。蕭紅ならずとも、東北から逃れてきた青年たちは、故郷の山に、河に、コウリャンの粥に、思いを馳せた。そんなとき、蕭紅の脳裏にはいつも、幼い日々を過ごした裏庭の光景が浮かんだ。彼女は蕭軍に語る。「門前にはヨモギが生え、裏庭には紫色の小さなナスの花が咲き、キュウリの蔓が支柱を這い登るの。」[19]生命が躍動している裏庭、祖父と過ごした屈託のない日々、その甘美な記憶は、間違いなく彼女に安らぎをもたらしたことであろう。

「胡蘭河という小さな町に、わたしの祖父が住んでいた」という書きだしで始まる第三章は、祖父と過ごした屈託ない日々が断片的に綴られる。

人生の終りにさしかかった老人と、これから人生を歩き始めようとしている幼い少女。一人は年老いて、一人は幼く、どちらも社会的弱者である。だが、少女にとって、世界に祖父さえいれば十分で、なにも恐くなかった。

屋敷の北側に広がる裏庭。そこには、蝶やトンボが飛び、花は咲き、草木は青々と茂る。少女は元気に走り回り、祖父は庭仕事に勤しむ。庭じゅうに生気が漲り、蝶やトンボや花や草木はなんと美しく光り輝いていることか。その光溢れる情景からは、作者の生きとし生けるものすべてに対する憧憬にも似た熱い思いが、ひしひしと伝わってくる。

祖母の死後、「わたし」は祖父の部屋で過ごすようになり、祖父から口伝てで詩を学び始める。朝に詩を唱え、夜に詩を唱える。詩を唱えていればご機嫌で、その声は屋敷じゅうに響き渡った。そして、もう一つ、食べることが大好きだった。祖父が、たまたま井戸に落ちて死んだ子豚やアヒルに黄土を塗りつけて蒸し焼きにし、「わたし」に食べさせた。

> わたしが食べるのを、祖父は傍らで見ている。祖父は食べない。祖父は、わたしが食べ終わってから食べた。彼は、わたしの歯が小さいので、噛めないといけないと思い、さきに軟らかいところをわたしに食べさせ、残ったのを祖父が食べた。
>
> 祖父は、わたしが呑み込む毎にうなずく。そして嬉しそうに言った。
>
> 「こいつは本当に食いしん坊だ」とか、「こいつは本当に食べるのが速い」とか。[20]

目を細めて孫を見守る老人の姿が目の前に浮かぶようではないか。作者は何ら技巧を凝らすことなく淡々と情景をスケッチして、祖父の像をありありと描き出している。その人間味溢れる像からは、祖父に向けられた作者の温かな眼差しが感じ取れるのである。

「わたし」はその味が忘れられず、アヒルが井戸に落ちるのを楽しみにするが、二度とアヒルは落ちない。それでアヒルを井戸に落とそうと、井戸端でアヒルを追いまわす。祖父が「アヒルを捕まえて焼いてやるよ」と言って制止しても、わたしは「井戸に落ちたのがいい、井戸に落ちたのがいい」と言って、祖父の言うことを聞かなかった。

利発で意地っ張りの孫娘と、孫娘を温かく包み込む祖父。この二人のほのぼのとしたシーンは、どこか懐かしい牧歌的な情緒に満ちていて、深く心に染み透る。

五

第三章では「わたし」を主人公に物語が展開したが、第四章では「わたし」の周囲の世界に、目が向けられる。それは屋敷の庭であり、屋敷の敷地内に暮らす借家人たちである。

第四章は全五節から成り、第二節と第五節は「わたしの家は荒涼としている」、第三節と第

四節は「わたしの家の庭は荒涼としている」という書きだしで始まる。

荒涼とした庭には一面にヨモギが生い茂り、風が吹くとざわざわと音を立てる。片隅には朽ちた木材や古い煉瓦が放置され、鉄のすきは錆びて、まるで黄色い泥で作られているようだ。

> それ〔鉄のすき〕は自身が衰弱し、黄色くなるばかりでなく、雨が降ると、びっしりまみれついた黄色の色素が溶け出して、雨水といっしょに流れ出す。豚の餌箱の半分はすでに黄色に染められてしまった。
>
> その黄色い水流はさらに遠くまで流れ、それが通り過ぎた地面は黄色く染められる。[21]

自分自身が腐蝕するのみならず、周りにその腐蝕をまき散らしていく。「この黄色の色素の流れは、因習や人間の醜さが周囲をひたひたと汚染していく様を象徴している」[22]かのようだ。

屋敷の敷地内には、古い家屋がいくつかあり、豚飼いの一家、粉挽き、車引きの一家に貸している。家はぼろぼろで、住人も無知で貧しい。

この章で登場した車引きの一家が第五章で、粉挽きが第七章で、主要人物として登場する。

六

第五章。夏、借家人の車引き一家のところに、童養媳が買われてくる。色が黒くてにこにこしている、いかにも元気そうな少女である。ところが、この少女が、胡蘭の人々の「童養媳の規格」に合わない。「婚家に来たのに、ちっとも恥ずかしがらない」「来た最初の日に、ご飯を三杯も食べた」「十四歳（実際は十二歳だが）のくせに背が高すぎる」等、些細なことばかりであるが、一つ一つ胡蘭の人々の気に入らなかった。

「中国封建社会における童養媳は『虐待される者』と同義語であって、人の顔色を窺い、奴隷的態度を示さなければならない。童養媳の振る舞いが規格に合っていないので、社会の様々な力が働いて、作り直しにかかった。」[23]

幾日も経たないうちに、車引きの家で少女の折檻が始まる。どのように折檻したか？　金儲けのチャンスとばかりにやって来たペテン師のような占い師に、姑が弁解する。

> 「この子がうちに来てから、いじめたりなんぞしていないよ。どこの童養媳が、一日に八回ぶたれ、三回罵られないかね？　わたしだって、ぶったことはあるさ。ちょっと脅しただけのことさ。わたしゃ、ひと月あまりしかぶってないよ。まあ、ちょっときつくぶったけど、きつくぶたなきゃ、いい人間に躾られないものね。わたしだって、泣き叫ぶほどきつくぶちたくはないよ。この子のためを思ってやったんだ。きつくぶたないと使い物に

ならないからね。何度か梁から吊して、叔父貴に皮の鞭でしばいてもらった。思い切りしばいたら、気を失った。だけど、気を失っていたのはほんの煙草一服ほどの間で、水を掛けたら正気に戻った。ちょっときつくぶったら、全身青アザだらけになって血も出た。だけど、すぐに卵白を擦り込んでやったさ。腫れても大したことはない、十日か半月で治ったよ。……」[24]

「いじめてない」と言いながら、これほど残酷ないじめはない。しかも、姑たちの意識レベルでは、少女のためを思って「善意」でいじめているのである。毎日、車引きの家から少女の泣き声が聞こえてくる。冬になって泣き声は止んだが、今度は跳大神の太鼓がドンドンと鳴り出した。車引きの一家は、元気な少女を折檻して病気にし、挙げ句、治療に奔走する。跳大神、民間療法、占い、とあらゆる療法を尽くすが、少女の病気はよくならない。少女は「家に帰る」と泣き叫ぶが、童養媳にするのに掛かった費用を思うと帰すわけにはいかない。そのくせ、ペテンのような跳大神や占いには、爪に火を灯すようにして貯めた金を惜しげもなくつぎ込む。終には、取り憑いた霊を払うために、少女は衆人の前で裸にされ、熱い湯の中に入れられる。

彼女は大きなカメの中で、叫び、跳びはね、必死で逃げようと、狂ったようにわめいた。彼女の傍らに立っている三、四人がカメの中から熱い湯を汲んで彼女の頭から注いだ。湯を注がれて顔が真っ赤になり、彼女はもはや、もがくことができなくなって、おとなしくカメの中に立っていた。彼女は外へ跳びだそうとしなくなった。恐らく跳びだそうにも跳びだせないと思ったのであろう。そのカメはとても大きくて、彼女が立つと、頭だけが出ていた。

わたしは長い間見ていたが、彼女は動きもせず、泣きもせず、笑いもしなくなった。顔じゅう汗だらけになり、顔が赤い紙のように真っ赤になった。[25]

少女はカメの中で気を失って倒れる。すると、少女がカメの中でもがいていたときには傍観していた人々が、急いで彼女をカメの中から救い出し、「熱い湯を注ぎ掛けろ」と煽っていた人々が、彼女に水を注ぎ掛けてやる。

やがて、見物人たちは、見るべきものは見た、と帰りかける。大神は、見物人が帰ってしまってはまずい、とばかりに声を張り上げて祈祷を唱え、太鼓を激しく打ち鳴らし、少女の顔に酒を噴きかけたり、針で少女の指を刺したりする。

間もなく、童養媳は息を吹き返した。

大神が、入浴は三回やらなければならない、あと二回やらなければならない、と言った。

> すると、人々は大いに奮い立った。眠たい者も眠くなくなったし、家に帰って寝ようとした者も元気付いた。見物に来た者は三十人を下らない。みな、眼がぎらぎら光り、元気百倍だ。見ようよ、一回やって気を失った、二回やったらどうなるんだろう？　三回やったらなんて、想像もできない。それで、見物人の心は神秘の思いで膨らんだ。[26]

他人の不幸を、まるで見世物でも見るかのように好奇心いっぱいに見つめる群衆の心理が、なんとも鮮やかに表現されている。おそらく阿Qが刑場に引かれていくときに見た、あの送り狼の眼よりもっと恐ろしい群衆の眼を、このとき、童養媳も見たであろう。

こうして、色が黒くてにこにこしている、いかにも元気そうな少女は、童養媳として嫁いで来て半年も経たないうちに、むざむざと死に追いやられてしまう。

この点について、茅盾は「読者は少女に同情し、少女を哀れみ、少女は無実だ、と叫ぶ。と同時に、憎悪の気持ちに駆られる。だが、憎悪する対象は姑ではない。この姑もかわいそうだと感じる。彼女もまた『数千年来の習慣に従って考え、生活する』犠牲者なのだ」[27]という。また、薛暁芬は「童養媳の姑や童養媳を結果的に死に追いやった周りの人々に対して、作者は言葉を荒げて真正面から批判したりはしていない。非難の矛先を単純に姑に向けているのではなく、むしろ姑や胡蘭河の人々に深い同情を寄せている」[28]と、作者の心情を読み解いている。

郭秀琴は「大切なことは、蕭紅が鬼神を崇める世俗文化のでたらめ性を察知したのみならず、さらに掘り下げてその残酷な本質を知り抜いたことである」と論じ、次のようにいう。

> 童養媳を引き取った姑と周囲の人々から、原始的な野蛮性および理性を失った狂気が見て取れる。人々は目に見えない力に突き動かされて、まるで病魔に取り憑かれたかのようであり、世の中の秩序が覆る。美しいものは醜いものと見なされ、健康なものは病気と見なされ、無邪気で活発なものは恥知らずと見なされる。童養媳はこのような状況下での「無責任で無自覚な殺人集団」に殺されたのである。[29]

被抑圧者である貧しい民衆が、より弱い立場にある人間を独りよがりの善意から虐待し続け、死に至らしめる。作者は、童養媳の死という衝撃的な事件を描いて、悪意なき民衆が「無責任で無自覚な殺人集団」[30]と化す深刻かつ重大な問題を、私たちに提示したのである。

七

第六章は蕭紅の祖父の一族「有二伯」の物語である。彼には身寄りがなく、三十年ほど前、蕭紅の祖父に引き取られて胡蘭に来た。いわば居候である。

蕭紅は、『胡蘭河伝』を執筆する前に「有二伯」を題材にした短編を書いている。1936年に発表した『家族以外の人』である。そのとき、蕭紅は単身、東京にいた。「有二伯は、異国にいてもふと思い出し、思い出せば書きとめずにいられぬほど、蕭紅に深い印象を残した人物だった」[31]のである。

その有二伯は偏屈者で、雀や犬としゃべるのは好きだが、人と話すことはほとんどない。たとえ話したとしても、風変わりで、しばしば要領を得ない。

日露戦争のとき、胡蘭の町にはロシア兵が侵入し、略奪や殺戮が相次いだ。そのとき、祖父たち一家は有二伯を残して逃げ出す。有二伯は恐怖に駆られながらも、家を守った。しかし、今では、その有二伯を、父は厄介者扱いする。

金のない有二伯は、蕭紅の家の納戸から古道具を盗み出しては、小銭に換えていた。年寄りの飯炊きがそのことで有二伯をからかい、よく口喧嘩になる。

> ときには、彼らの口喧嘩は二、三日続くことがあるが、いつも最後には有二伯が言い負かされる。飯炊きが有二伯に、「絶後〔跡取りがいない〕」と罵るからである。
>
> この言葉は、他のあらゆる言葉、例えば、「閻魔大王に会う」というより、有二伯を滅入らせる。彼は泣き出して、言う。
>
> 「まったくだ！　墓に土をかけてくれる人もいない。一生むだに生きて、最後はなんにもない。家なし財産なし、死んだら霊頭幡〔死者を先導する幟〕を掲げる人〔息子〕もいない。」
>
> そこで、彼ら二人は、また仲直りして、にこにこと、以前と変わらず平和な日々を過ごすのだ。[32]

ある日、有二伯は蕭紅の父親にひどく殴られる。有二伯は六十歳、父親は三十過ぎである。有二伯にしてみれば、年下の者が年上の者を殴るなんてとんでもないことだった。ましてや、親子ほど年の差がある。その夜、有二伯は首を吊ろうとした。だが、果たせなかった。またあるとき、井戸に跳び込もうとして、果たせなかった。「やつは死ぬのが恐いのさ」「あいつは死にっこないよ」と、周りの者に嘲笑される。

跡取りもなく貧しい有二伯には「過去」しかない。夜中に、有二伯の独り言が聞こえてくる。

> 「……ロシア人の軍刀がキラリと光って、やつらは、殺すと言ったら殺す、たたき切ると言ったらたたき切るんだ。あの肝っ玉の大きい、死を恐れない輩が、ロシア人が来ると聞いて、家業も放っぽりだして命からがら逃げてった。あのとき、肝っ玉の小さいこのおれが守ってなきゃ、ロシア人が行っちまったあとには、ズボンの一着もなかったろうよ。今、食べるにも着るにも不自由なくなったら、以前のことなんか思いだしもしない、すっ

かり忘れちまって……」[33]

有二伯は現実を直視しようとしない。直視するにはあまりにも惨めな現実が目の前にあった。彼はその現実を認めたくなかったし、その現実から逃げたかった。そして、現実から逃避すればするほど、さらに惨めな現実に直面していく。「精神的満足でプライドを保とうとするが、実際には、しばしば屈辱にまみれる。主人や召使いのどちらにも、精神的弱点を握られてバカにされ、またそれに刃向かう力もない」[34]のである。

八

第七章の主人公「馮歪嘴子」は貧しい粉挽きである。秋になって糯粟が収穫されると、粟餅を作って売り歩く。蕭紅はこの粟餅が大好きだった。

ある日、「わたし」は、粉挽き小屋のオンドルに、女と赤ん坊が寝ているのを見かける。その女は近所で評判の王大姑娘だった。彼女が馮歪嘴子と野合したことが知れ渡ると、それまで王大姑娘を褒めそやしていた人々が、彼女のことを貶し始め、馮歪嘴子の家の動静を探りに行っては、まことしやかなデマを飛ばす。例えば、馮歪嘴子の住むわらぶき小屋はとても寒いので、赤ん坊の泣き声がしないから凍え死んだに違いないとか、オンドルの上に縄があったから首を吊るに違いないとか、彼が菜切り包丁を買ってきたから自殺するに違いない等々。

しかし、馮歪嘴子夫婦は幸せに暮らしていた。

> 彼の息子は普通の子供と同じように、七ヶ月で歯が生え、八ヶ月で這うようになり、一年で歩けるようになり、二年で走れるようになった。
>
> 夏、その子は服を着ず、腹掛け一枚で、門前の水溜まりでカエル捕りをしていた。母親は門の前に坐って、彼の腹掛けに刺繍をし、父親は粉挽き小屋で梆子〔拍子木〕を打ち鳴らしながら、ロバが石臼を回すのを見守っていた。[35]

王大姑娘は第二子の出産で命を落とす。四、五歳の子供と生まれたばかりの赤ん坊を抱えて、「今度こそは、馮歪嘴子もおしまいだ」と、誰もが彼の破滅を信じて、好奇の目で見守った。

> 彼は、この世界で、人々が絶望的な目で彼を見ていることを知らなかった。彼は自分がどんな苦境に立たされているか知らなかった。彼は自分が「おしまい」だということを知らなかった。彼は考えたこともなかった。
>
> 彼は悲しかったし、しょっちゅう眼に涙を湛えていたが、息子がロバを引いて水を飲ま

せることができるようになったのを見ると、すぐ、涙を湛えた眼に笑みがこぼれた。[36]

こうして、馮歪嘴子は周りの人間の思惑など気にも留めず、子供の成長を楽しみに静かに生きていた。茅盾は、馮歪嘴子の強靱な生命力に感嘆する。

> 彼らは最下等の植物と同じで、わずかな水分と土壌と陽光だけで生存できる。甚だしきに至っては陽光がなくとも生存できる。彼らのなかでも、粉挽きの馮歪嘴子は生命力が最も強い。強くて思わず賛美したくなるほどだ。しかしながら、馮歪嘴子のどこを探しても、生命力がとりわけ強いという以外、特別なものは見当たらない。そして、それ（馮歪嘴子の生命力の強さ）は原始的な頑強さなのである。[37]

蕭紅は、この貧しくともひたむきに生きる馮歪嘴子に愛すべき人間像を重ねた。彼は決して賢くないし、思慮分別に長けているとも思えないが、素朴で、虚栄心を微塵も感じさせず、人間として真面目に生きていた。「もしかしたら、自覚的生命意識などなく、彼の頑強さは単に生命の本能的力であったかもしれない。しかし、この最も基本的で最も内在的なものが貴重である、ということがいっそう際立っている」[38]のである。

人間の愚かさが作り出す童養媳と有二伯の残酷で悲しい物語のあと、苛酷な運命にもめげずしぶとく生きる馮歪嘴子の姿は、暗闇のなかにかすかな光を感じさせる。

九

ここで、『胡蘭河伝』において、最も重要な鍵を握る民衆に目を向けてみよう。

先にも少し触れたが、『胡蘭河伝』に登場する民衆は「無自覚で無責任な殺人集団を形成する群体〔マス〕」[39]であり、薛暁芬は「胡蘭河の民族社会の重要な特徴は群体性にある」[40]という。作者はその「群体」を構成する人々の生態を滑稽味に富んだ筆致で活写し、彼らの心理と、その無責任で無自覚な人間集団が如何に残酷な行為をなしうるか、あぶり出した。

胡蘭のような閉鎖的社会においては、他者に受け入れられなければ、それは「死」を意味する。社会の秩序を維持するための規範は絶対的なものとして機能するのである。胡蘭社会の場合、絶対者は封建道徳であり迷信であった。封建道徳と迷信にがんじがらめに縛られて、人が人でないのが当たり前、人が人として生きようとすると、寄ってたかって「矯正」しに掛かった。人々はみな、他者に受け入れられんがため、つまり「生きる方便」として絶対者に服従し、主体的に思考することを放棄した。その結果、善悪を判断する力を失ってしまったのである。

蕭紅は、こうした閉鎖的社会における民衆の心理を見通し、彼らの無責任で無自覚な生き様

を厳しく批判した。と同時に、絶対者に服従せざるを得ない民衆の置かれた悲惨な状況も十分理解していたし、彼らが他者の顔色を窺ってびくびくしている哀れな存在であることも見抜いていた。まさしく、「蕭紅はすでに現代的視点に立って人間を哀れんでいた」[41]のである。

そうした登場人物に対する作者の態度を、茅盾は次のように評している。

> 彼女〔作者〕は容赦なく彼らを鞭打ち、一方では彼らに同情する。彼女は伝統に屈服した人々がなんとも愚かで保守的であり、ときには残酷でさえあることを描き出した。そしてまた、彼らの本質は善良であることをも描き出した。[42]

中国の現代作家余華はこう語る。「作家は二つの激情を保持しなければならない。一つは冷酷。どんなにつらくても人物を突き放さなければならない。もう一つは人物に対する愛着。とりわけ、主人公に対して深い愛情を持たなければならない。このような作家が初めて人の心を打つ作品を生み出すことができる。」[43]この冷酷と愛情は、蕭紅の登場人物に対する態度そのものといえるであろう。冷酷のうしろにそこはかとなく漂う深い愛情を感じ取ることができるからこそ、読者は哀しくて辛いこの物語に引き込まれてしまうのである。

十

これまで見てきたように、『胡蘭河伝』は胡蘭の町を舞台にした、各章完結ともいえる物語を連ねた作品である。その構成については、「一貫したストーリー性に欠ける」とか「細々としていて断片的だ」といった批判もあるが、尾坂徳司は次のような感想を述べている。

> 私は、筋立てさえなく、闇の中でキラリと光る宝石の破片をよせ集めて組み立てたこの一種の追憶記は、彼女の人間形成の諸因素をみずから語るものであり、そのよせ集めた映像・印象・気分を一つの音色で統一したところに、蕭紅の作品の特徴があると思う。[44]

尾坂が「破片をよせ集めて組み立てた」というこの作品は、それぞれの物語の配置に作者の周到な計算が見て取れる。「童養媳」や「有二伯」や「馮歪嘴子」などは短編としても十分読み応えのある素晴らしい作品であるが、読者が町や風俗や人々にすっかり馴染んで親しみさえ覚えるまでになった胡蘭の風景のなかに嵌め込まれると、個別の短編として読まれるより遙かに「人の心の奥深く沈んで、いつまでも忘れられない」[45]強いインパクトを持つ。まさに、「各章は独立した物語であるが、一つにすると、感動させる効果が増す」[46]のである。

蕭紅は『生死の場』を書いたとき、男たちから「全体の構成に有機的つながりが欠けている」

とか「中心に向かっての発展が感じられない」といった批判を受けた。『胡蘭河伝』はそうした批判への「蕭紅の意識的答え」と秋山洋子は見る。秋山は「次元の異なるさまざまなものが、それぞれに価値を持って存在している。それでいながら、それらは無意味に並列されているのではなく、連想の糸で縦横に結びつけられている」と述べ、次のように結論する。

> このような『胡蘭河伝』の構成は、筆先から自然に流れでたものではなく、蕭紅によって意識的に選ばれ、構築されたものであり、それこそが批判者への挑戦だったと筆者は考える。『胡蘭河伝』の世界は、『生死の場』を経て蕭紅がたどり着いた彼女自身の表現――女の表現の世界である。蕭紅は、女の悲劇を描いたことにおいて中国フェミニズム文学の先駆者であっただけでなく、女の表現の方法を切り開いたことにおいても先駆者であった。[47]

『胡蘭河伝』は、秋山がいうように「女の表現の方法を切り開いた」先駆的作品と位置づけることができ、その意味において、極めて現代的意義を持っている。

蕭紅は律動的で躍動感溢れる独特の文体で、生き生きと情景を描き出した。茅盾が「それ〔『胡蘭河伝』〕は一篇の叙事詩である」[48]と称え、王孟白が「蕭紅はまずもって卓越した抒情詩人である」[49]と評する所以である。「用いられていることばは素朴で飾らず、しっとりとした情緒を湛えつつ生き生きと真に迫る。」[50]游友基は「悲劇的場面ではしばしば平淡かつユーモラスな語り口で表現し、ユーモアの筆調で情感を和らげている」と述べ、さらに続ける。

> しかし、情感を和らげているというのは表面的現象であって、情感は伏流となってこんこんと流れ、抑えれば抑えるほど、和らげれば和らげるほど、ますます張力が増し、ますます重苦しくなる。まさに、和らげることと重苦しくなること、この矛盾が統一されて、作品になんともいえないしみじみとした情趣を添えている。[51]

「風刺があり、ユーモアもある。読み始めは軽やかな感じなのだが、読み進むに連れて次第に重苦しくなってくる。だが、それでも美しい。その美しさが少し病的であったとしても、それでも、眩惑されずにはおれない。」[52]

かくして、最後のエピローグを読み終えたときには、胸を締め付けられるようなずっしりとした重い感動が残るのである。

おわりに

茅盾は、『胡蘭河伝』の「序」において、「蕭紅の幼年時代が寂寞」であり、「蕭紅の境遇が寂寞」であり、「蕭紅の気持ちが寂寞」であり、「このような〔寂寞の〕心情が『胡蘭河伝』に暗い影を投げかけ、作品全体のムードを支配しているだけでなく、思想的にもその暗影が見られる。惜しむべき事である」[53]と批判した。

日中戦争が激化し、抗日一色の時代に出版された『胡蘭河伝』の評価は、必ずしも芳しくなかったのである。茅盾自身も1946年当時の緊迫した政治情勢のなかで、『胡蘭河伝』の思想的弱点を問題にせざるを得なかった。「序」でほんの数行、思想的弱点として批判した部分が、その後、中国国内における『胡蘭河伝』批評の模範となって、「抗日が描かれていない」とか「懐旧の情調に流されている」といった否定的見解が『胡蘭河伝』の評価として定着する。そして、その評価は1980年代まで続く。[54]

そうした評価に対して、葛浩文は次のように反論する。

> 蕭紅が『胡蘭河伝』を書いたとき、他の作家は、ほとんどが戦時ルポの文学や戯曲、あるいは抗日小説や短編の宣伝作品を書き、文学作品と言えるものはごく僅かであった。蕭紅には蕭紅の考え方があった。彼女は、単なる宣伝家ではなく、正真正銘の作家でありたかった。だから、彼女の『胡蘭河伝』は、当時の作品のなかで、最も優秀な作品となった。しかし、政治的観点から、この作品および彼女のその他の作品は、当時の文学評論家から手厳しい批判を受けた。……文学評論家たちは、戦時から時間が経てば経つほど、この作品が創作の手法において実に素晴らしいものであることを認めるようになった。これは、まさしくこの作品が不朽であることの証である。[55]

蕭紅自身、「題材が作者の情感としっくり馴染んだ状態になるか、或いは、作者に思い焦がれる情緒が生じなければならない。だが、それには一定の時間が必要だ」[56]と語っている。

彼女が抗日戦線の時期に抗日小説を書こうとしなかったのは、現実に対する感情が生のままでは真の文学作品は生まれないと考えていたからである。深刻さがユーモアに昇華されてこそ、人の心を揺さぶる力を持つということを、彼女は知っていた。

蕭紅が『胡蘭河伝』を書いたのは二十六歳から二十九歳にかけてであるが、その題材は二十年近くもの間、彼女の胸の中で温められていた。二十年という歳月によって怒りや憎しみといった生々しい感情が濾過され鎮静化されて、「泰然とした平静さと大きな哀れみの情」[57]がもたらされたのである。その哀れみの情を湛えた冷静な目で見つめ直したとき、故郷の景色や人々にいっそうの愛おしさを覚え、また、彼らを苦しめるものにはいっそうの憎しみを覚えた。

そして、このように淡々とした哀しくも美しい作品が生み出されたのである。

王勝は次のように指摘する。

> 蕭紅の小説は、人間の霊魂を透視する鏡のように、胡蘭河の老若男女に自身の本当の姿を見させ、時代の異なる更に多くの中国人に自分の正体を見させる。この鏡の中に自己の浅はかさ、無恥、虚偽、精神の麻痺、愚昧を見いだした人々は、平素気にも掛けていない醜さを映し出されて恥じ入る。また、わけもわからず生きている多くの人々は、拠り所なく浅はかで目的のない哀れな己の姿を映し出されて、震え上がる。そして、自己反省し、自己浄化し、自己向上したいという願望を生み出すのである。[58)]

蕭紅は『胡蘭河伝』において、あらゆる人間に共通する愚昧と善良を描いて、我々に警鐘を鳴らしている。それは胡蘭という特殊な場所の、二十世紀初頭という特殊な時代の物語ではあるが、そのなかではこの世に生きる人間の普遍性がみごとに描き出されているのである。

『胡蘭河伝』は、胡蘭の情景や人々の姿を彷彿とさせる律動的で躍動感溢れる独特の文体によって、人間世界の不条理の深刻さを浮き彫りにし、読者の心を動かさずにはおかない。

注

1）『胡蘭河伝』（注２参照）第２章第２節（『蕭紅全集』哈尔滨出版社、1998年、142頁）。

2）長編小説『胡蘭河伝』は1940年９月１日から12月27日まで『星島日報』副刊「星座」に連載された。1941年上海雑誌図書公司より、1943年６月桂林河山出版社より単行本出版。以後、出版を重ねる。本稿では『蕭紅全集』（ハルピン、哈尔滨出版社、1998年）より引用。

3）蕭紅（張乃瑩）作家。黒竜江省胡蘭県胡蘭の地主の家に生まれる。長編小説『生死の場』『馬伯楽』『胡蘭河伝』、短編小説『手』『小城三月』、散文集『商市街』など。（1911～1942）。

4）孟悦・戴錦華『浮出歴史地表――現代婦女文学研究』河南人民出版社、1989年（『浮出歴史地表――現代婦女文学研究』北京、中国人民大学出版社、2004年７月、188頁）。

5）錫金「蕭紅和她的『胡蘭河伝』」（『長春』1979年５月）によると、蕭紅は武漢の錫金の家に寄寓していた1937年12月に『胡蘭河伝』の執筆を始め、そこで第１、２章を書き上げたという。（王観泉編『懐念蕭紅』ハルピン、黒竜江省人民出版社、1981年２月、41頁）。

6）『胡蘭河伝』「尾声」（前掲書274、275頁）。

7）聶紺弩「在西安」『新華日報』重慶、1946年１月22日（『懐念蕭紅』31頁）。

8）満州事変前後の東北の農村を舞台として、苛酷な条件下に生きる貧しい農民を描いた小説。

9）蕭紅「致蕭軍（第三十四信）」1937年12月（『蕭紅全集』1300頁）。
肖鳳『蕭紅伝』天津、百花文芸出版社、1980年12月12日、79頁。

丁言昭『蕭蕭落紅情依依』四川文芸出版社、1995年３月、45頁。

10）許広平「追憶蕭紅」『大公報』副刊「文芸」上海、1945年11月28日（『懐念蕭紅』13頁）。

11）聶紺弩前掲（前掲書31頁）。

12）薛栄玉「女性的才情　女性的悲哀」『中華女子学院山東分院学報』2006年第４期、53頁。

13）蕭軍「蕭紅書簡輯存注釈録（四）」『新文学史料』1979年（『蕭紅全集』1327頁）。

14）蕭紅「無題」『七月』武漢、1938年５月16日（『蕭紅全集』1215頁）。

15）葛浩文〔Howard Goldblatt〕『蕭紅評伝』ハルピン、北方文芸出版社、1985年、141頁。

16）夏明釗「《胡蘭河伝》（長編小説）」『中国現代文学名著題解』北京、中国青年出版社、1993年12月、762頁。

17）『胡蘭河伝』第１章第５節（前掲書128頁）。

18）『胡蘭河伝』第２章第４節（前掲書155頁）。

19）蕭紅「失眠之夜」『七月』武漢、1937年10月16日（『蕭紅全集』1185頁）。

20）『胡蘭河伝』第３章第９節（前掲書179頁）。

21）『胡蘭河伝』第４章第１節（前掲書183頁）。

22）郭秀琴「論蕭紅小説的文化批判意識」『語文学刊』2007年第3期、34頁。

23）郭秀琴前掲（前掲書35頁）。

24）『胡蘭河伝』第５章第４節（前掲書207頁）。

25）『胡蘭河伝』第５章第５節（前掲書223、224頁）。

26）『胡蘭河伝』第５章第５節（前掲書225頁）。

27）茅盾「胡蘭河伝／序」『胡蘭河伝』（『蕭紅全集』105頁）。茅盾によるこの「序」は「論蕭紅的『胡蘭河伝』」と題して1946年12月『文芸生活』に掲載された。1947年寰星書店出版の『胡蘭河伝』に「序」として掲載され、以後「序」として掲載されるようになった。

28）薛暁芬「談《胡蘭河伝》人物塑造的深層意蘊」『西安文理学院学報』2006年４月、11頁。

29）郭秀琴前掲（前掲書35頁）。

30）魯迅「我之節烈感」に「世の中には古来わけもわからず伝えられてきた理不尽な道理があり、歴史と数の力で意に合わない人を抹殺できる。こうした『無主名無意識的殺人団』によってどれだけの人々が死んだかわからない……」という件がある。

31）尾坂徳司『蕭紅伝』東京、燎原書店、1983年、72頁。

32）『胡蘭河伝』第６章第11節（前掲書247頁）。

33）『胡蘭河伝』第６章第13節（前掲書249頁）。

34）張力「《胡蘭河伝》芸術談」『胡蘭師専学報』2000年7月、61頁。

35）『胡蘭河伝』第７章第７節（前掲書269頁）。

36）『胡蘭河伝』第７章第10節（前掲書273頁）。

37）茅盾前掲（前掲書108頁）。

38）薛梅「対温暖和蒼涼的“悄吟”」『承徳職業学院学報』2006年第１期、63頁。

39）孟悦・戴錦華前掲（前掲書187頁）。

40）薛暁芬前掲（前掲書10頁）。

41）孟悦・戴錦華前掲（前掲書191頁）。

42）茅盾前掲（前掲書108頁）。

43）許暁煜「余華訪談：我永遠是一個先鋒派」2000年１月26日。

44）尾坂徳司前掲（前掲書79頁）。

45）秋山洋子「蕭紅再読――「女の表現」を求めて」『世界文学』84号、世界文学会、1996年12月（『私と中国とフェミニズム』東京、インパクト出版会、2004年、160頁）。

46）葛浩文前掲（前掲書141頁）。

47）秋山洋子前掲（前掲書160頁）。

48）茅盾前掲（前掲書108頁）。

49）王孟白「不滅的足跡」『蕭紅研究』ハルピン、北方論叢編輯部編、1983年、４頁。

50）張力前掲（前掲書62頁）。

51）游友基「論蕭紅作品韻味与文体的独特性」『チチハル師範学院学報』1996年第五期、48頁。

52）茅盾前掲（前掲書108頁）。

53）茅盾前掲（前掲書109頁）。

54）例えば、『蕭紅研究』（1983年、前掲）に収められた王観泉「文学史編纂の問題点を探る」に、「文学史において、蕭紅に対する評価は、どれもこれも驚くほど似ている。……抗日戦争期に書かれた『胡蘭河伝』は、過去の生活を回憶するなかで、作者の旧社会に対する怒りを表現しているが、個人の生活の場が狭小であることによって生まれる孤独で寂しい心情がにじみ出ている」「今や、『胡蘭河伝』が抗日戦争を描いていないからといって、この思わず笑い出してしまう世態風俗画を、冷淡にあしらうこともなかろう。」という記述が見られる。

55）葛浩文前掲（前掲書138頁、144頁）。

56）「現時文芸活動与『七月』――座談会記録」1938年４月29日（『蕭紅全集』1319頁）。

57）孟悦・戴錦華前掲（前掲書191頁）。

58）王勝「蕭紅小説的風刺芸術」『山東文学』2007年４月、79頁。

（やまもと・かずこ　短期大学部講師）